

# 北國紀行

(三)

## 丹波浪人

○

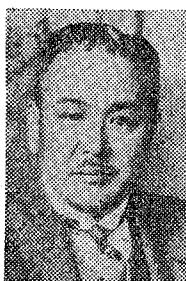
宇奈月温泉の一夜は雨で暮れた、S技師が筆者を此處に

引張つて來た原因の對象物。川底に掩えられた浴室も、今日は修繕中だと言ふので夫れの御利益に預ることが出來なかつたのは殘念だ。日本電力會社の黒部川發電工事のときに、人夫や工夫が一日の勞苦を慰める爲に利用した温泉が、社員の使用に供せられ、遂に名高くなつたので、利潤に利潤を逐ふて餘すことのない、資本家日本電力は、工事用材運搬の爲に省線三日市驛から此處宇奈月に引込むだ軌條を鐵道に鞍替して、温泉浴客の利便に供した勢で、今日のやうな大温泉場を見るやうに爲つたと聞かされた、其の勢で

もあるう、温泉旅館はバラツク式のものが多いし日電臭い香もするやうだ、

今日から富山縣のお世話になるのだが、宇奈月から三日市町までは雪があるのと雪の爲に橋が落ちてゐるので鐵道の厄介になつた、愛本村から泊町や三日市に出るには、何やら六ヶ敷名の付いた府縣道が通つてゐるが、兩側には立派な蘚木があるので、其の譯を聞くと、夫れば矢張り昔の國道であつたが、明治の時代に海岸寄に附替へられ今は失格して府縣道に爲つてゐるのだ、夫れも無理はない、いかに悠長な北陸街道の交通でも、態々愛本まで寄らないで三日市町から泊町へ直線に出るのが得てあるからだ、併

し愛本には黒部川に架けられた愛本橋と言ふのがあつて、昔から架橋技術を讃えてゐる、三千風行脚文集には、合本のはね橋は日本第一の奇棟、さながら虹梯の天工を奪ふ、東西の岩根に五拱、六尋の良木、甲を鑄入れ、片岸五段にはね重ね、行合の間八間には大桁を投渡し、橋梁最たくましく銅鐵にてくるみ長四十間に欄干を組みたり。と言つてゐる位で假令今の構造は夫れで無いにしても、餘り有名なものであるから見たかつたが之も雨の勢で御免を蒙つて、三日市町から魚津町へと急ぐのである。



齊藤立させつ

○

路面は新潟縣の夫れよりも良い線形も亦可なりだが、省鐵道線と交叉してゐて物騒な踏切も數くな、魚津や滑川、夫れから東西水橋町、何れ北國の漁師町だと豫想したのは間違であつた、矢張り旅して見なければ圖面だけでは認識を缺く、と誰やらが言つてゐた、成る程と賛成する。

出水で名に聞えた常願寺川、安政五年の地震に立山の一

部が崩けて砂を流してから、川床が淺くなつて降雨ある毎に水が出る、で上流の山地に砂防工事をして流砂を阻止してゐるが、賽の河原の石積み式で空腹にお茶漬的の效果が舉らないと見え、今でも水害に見舞はれてゐる、明治十一年車駕當願寺川堤防を過ぎさせ給ふとき、上人松と言ふ

ところで休はせ給ひ、水害のことなど御下問あつたと教へられ、明治帝の民を愛み給ふ大御心に襟を立てさせつゝ、いま一平民の子が其處を自動樹車で旅してゐるのは何だか勿體ない氣がしました。

富山縣廳へ立寄つて齋藤樹長官を訪れる積りだつたが、東上中だと聞かされ旅先きを急いだ爲に縣情を承る機會がなかつた、で長官論は失敬するが、彼は元鐵相小川平吉の女婿として誰知らぬ者はない位に言ひ囃されてゐる男だ、で大正六年の帝大出で現地位に据つてゐるやうに傳へる連中もあるが彼は果して噂のやうな人物であらうかを見てみ

たい、當縣の政黨の分野を見ると、中央政治には政友四、民政二の勢力と爲つてはゐるが、地方議會の分野は濱口内閣のお蔭で夫れとは違つて政友一四、民政一七の勢力を示してゐる、而政友系を濃度に持つと見らるべき齊藤長官は、地方政治の爲には民政黨の反対を買つて手も足も出ないのが通例見るところだが、彼が富山縣知事として赴任以來日淺いにも拘らずと大きな仕事をしてゐる、鈴木前知事時代から懸案と爲つてゐた縣廳舍改築問題やら黒部川愛本發電所の新設やらを物の見事に解決した外、例の庄川流木問題でも甘く納めた。夫ればかりではない三百三十萬圓を投する第二期道路改良計畫を樹立して縣治の進展に備へた、夫れであるから民政黨支部長の寺島權藏でも、いかに智恵を絞つて見たつて長官に對して楯つくことは出來ない、で民政の多數を占むる縣會も長官の提案にケチを附ける處がないので原案を鵜呑まさるを得ないと言つた調子、そこに長官齊藤の手腕のあるところを發見するであらう。彼は常に何事にても多くの言葉を用ひない、唯た人の言を聽いて

黙々然たるところがあるが、相手の主張に間違でもあらうものなら夫れこそ懸河の辯を振つて説伏する、大膽にして又一面用意の周到なことは若い長官として他の類を抜いてゐる、夫れに彼を評するに態々小川平吉を對象として論ずるのは氣の毒である。富山縣民が近來見ることの出來ない名長官と讚えてゐるのも當然であるが、女房役田島義士内務部長が、藥屋のやうに膝を折つて東奔西走する效績が加はつてゐることを見逃してはならぬ。

世間の悪口屋は、越中富山の反塊丹、鼻くそ丸めてアンボン丹などと言つてはゐるが、其の年產額數千萬圓に達してゐると、人間が萬事節約的に出來てゐて、他國の人があ六尺ふんどしをしてゐるのに此處では三尺ものゝ越中ふんどしをする位だから縣民は比較的富んでゐる、縣債だつて二千八百萬圓と言はれてゐるものゝ電氣事業公債が大部を占めてゐるので一般會計では七百八十萬圓位だから、まだノヽ起債能力がある縣だ、一つ大きな土木でも起して、富山藩主第二世前田正甫卿が、製藥の爲に縣民を永久に喜ば

してゐるやうに、縣民が永遠に亘つて禮讚するやうな事業を起すことが、蓋し牧民官の任務であらう、併しそを爲し遂げしむる爲には、齋藤長官の在縣を承からしむる外はない。富山市内は神通川の附替に依つて市勢に活を入れた、夫れは市の北端に態とらしく曲つて、喰入つてゐた神通川を直線に改修して、廢川敷を市街にしたことだ、夫ればかりではない富山と東岩瀬との間に運河を持て、富山を港灣都市化したことである、東岩瀬港の設備は十分でないにしても、之で富山が舟楫の便を増大したことは疑はない。廢川敷のお蔭で市道の擴張や新設も行はれたらしい、そこで

れる理由があるのに、其の當然視される理論を打破つて税金で支辨しやうと言ふのだから非難が起るのだ、勿論形式的な法律論からすれば違法ではない、併しながら立法論としては法律學上又は財政學上非難の多い條文であるから、其の適用に方つては其の運用を合理的ならしめなければならぬ、夫れが行政官の手腕に歸するのである、イヤ多く理屈は言はない、何れ薬屋さんが乗る電車であろうから、其の方で支辨して貰ひたいものだ。

## ○

富山から先き高岡に至る區間の國道は、知事白根竹介の時代に改良計畫が樹てられ、少し路線を變更して幅員十米に改善することに爲つた、白根知事は此處ばかりの道路を改良するのではなかつた、縣下重要府縣道の改良をも計畫して、事業費五百十八萬圓を昭和三年度以降五箇年間に支出して縣下の交通進展策を計つたのであつた、併し白根知事が折角計畫したことは財政の緊縮やらで漸く今日此頃本譯ではない、だから電車が特別會計で經營することが許さ

峠茶屋に行くのだが、新國道は師團を設けたときに造られた聯隊街道を利用する爲に路線を換へて、今は峠茶屋の切取をやつてゐる、其の切土を盛土に利用して富山鐵道を越えるやうにするのだ夫れから先きは幅員十米に出来上つてゐるが、まだ完成と言ふ譯には行かない、唯だ舊國道の峠茶屋を切開いてゐるので國道交通が杜絶してゐることだ、でも地方人士は例の隱忍自重の連中だから不平も言はずに迂回路を探つて歩いてゐるのは氣の毒な氣もする。

提供されたトロツコに身を委ねて雨中の國道見物、餘り感心しないが役目と心得て案内人の仰せ通りになる、省線吳羽驛を過ぎたところで鐵道を乘越え築造してゐるが、夫れから先きは用地の買収中だ、此處からトロに乗つて富山へ引返して呉れと言はれたが、跡戻りの嫌なK事務官、迂回路で吳羽驛まで自動車を廻して呉れと頼んだので暫く其處に待つこと一時間、夫れでもまだ來ない、では歩こうぢや無いかと語り合つて、路面の劣悪な雨道を高岡に向ふのであつたが、館本あたりの人家まで來ると、溝橋が掘返さ

れてゐる、是では假令自動車が追かけて來ても通れる筈はない、こゝで自動車の來る期待を心底から捨て、本格に徒步の心を固めたが、諦められないのは道路主事の小西君だけだ、修路工夫が毀してゐるのだから工夫を搜すと言つて附近の部落に工夫のありかを尋ねてゐる、K事務官と二人で、ヨ一なれば廢糞だ、二里や三里は走つても構はないと言痩我慢氣を出して歩きだしたが、國道は迂餘屈曲してゐるのに省線鐵道は一直線だ、歩るく身にとつてはいかにも癪だ、そこで鐵道線路に乗り換えて西へ西へと進むのであつたが、目ざしてゐる小杉の驛はまだ眼中のものとはならぬい、小雨に悩まされ足も疲れだしたと見え、斷念した筈の自動車に未練が出てくる、小杉の手前でトウノヽ自動車に追ひ附かれて徒步の時間的でなかつたのを嘒つたが、運動したと心得ば體の爲にもなる。お蔭で驛前の辨當に舌鼓を打つのであつた。

○

小松から庄川右岸の大門町まで四千七百米の間を、幅員

十米に改築することに爲つて、此處は内務省直轄事業として仕事してゐる、八年度の仕事だと言ふのに小杉の驛前ではまだ人家が移轉してゐない、進工は遅いネーと言へばK事務官は、早いとは言ひ悪いが此處の人間は、ケチン坊で算盤が高いから用地の買収に悩まされる、此處で發表した價格が安いか高いかを、國境の俱利加羅峠の改修工事場まで問合せに行く位だから、念の入つたものだ、イカニ歩くことに妙を得てゐる藝の行商人とは言ふものゝ守錢奴的根性は人の想像を許さない、と、現場の苦心を物語るのであつた。

路面もまだ轉壓されてゐない、唯だ眼につくのは田園の中に造る道路に側溝の對側壁を捨ててゐることで少々贅澤な感がする、道路側にだけ側溝壁を作れば十分で、家屋を建てるときに、土地の所有者が作れば足るからだ、併し之が出來上つたら北國第一の近代道路と言はれるであろう、内務技師大島太郎君の話に依ると、沿線部落の人間は此國道を富山や高岡の人々が通る道路と心得てゐるから、餘り

喜んでゐないそうだ、成る程、個人經濟意識の強い連中から見ればソーセ感するであらう、確かに大島村だと聞いたが、町村道の一部が新國道と爲るので其の國有道路敷を買収して呉れと言つて來たとやら聞かされ、一行は田舎式な慾張り根性に驚かされるのであつた、國道改良終點附近庄川右岸に紡績工場が建てられつゝある、何でも大門町の發展策として町當局が斡旋し土地を安くし此處へ迎へて來たのであつたが、地元民は工場を建てる爲に用水権を侵害すると言つて莫大な補償をせしめ、會社は結局價の高い土地を買はされたことに爲つた、と言ふことだ、此手合としては満更嘘でも無からう、併し國道事業は利潤を逐つて經營する私的事業とは違ふのだから、如何に守錢奴とは言へ、専らは公共的事業の爲には遠慮しても可いであらう。

國道改良の終點は、庄川堤防で止つてゐて庄川堤防を南に行つて現國道に取附くのであるが、夫れは假設的な計畫であつて永久策としては、庄川に架橋し高岡都市計畫道路に連絡せしむるのが當然である、幸ひ高岡市内接續箇所に

は八間幅の立派な道路があるのであるから。之に接続する所までやつて始めて國道改良の效果が舉る譯だ、時局匡救事業として始めた國道工事だから打切らるゝものとしても、其の跡始末として繼續する必要のある點に於ては、蓋し模範的なものであらう、新架橋に依つて今の國道にある雄神橋は國道の資格を失ふので、大門町の有志は屢議會に請願したり、當局に陳情したりして雄神橋が從來と同じやうに維持されむことを運動してゐる、併し新國道を他郷の人を通じて排斥否な歡迎しない、住民の誤った考察からすれば雄神橋は彼等地元民だけが通る橋だから、彼等だけの支辨に依つて維持するのが當然であろう。

○

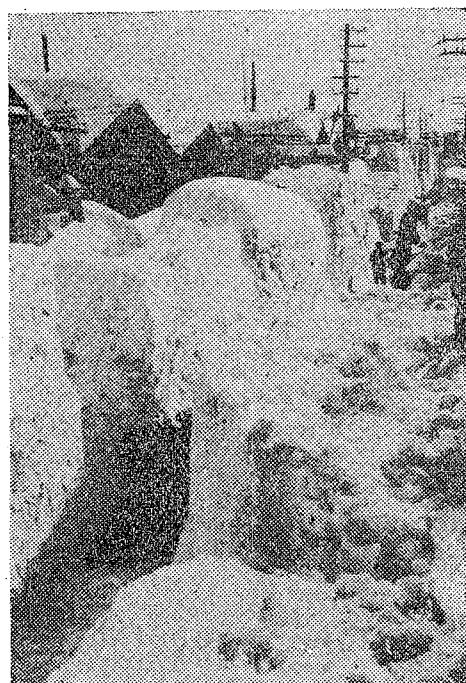
高岡市に這入つたが、今日の旅程はまだホテルに腰を据えさせて呉れない、夫れと言ふのは伏木港の視察が残つてゐるからである、小學時代から重要港だと教へられた伏木港、夫れと工業都市高岡とを連絡するにはどうすれば可いか、とは常に机上で考へさせられたことであつた、とこ

ろが圖らずも此度の旅で實見することが出來た、高岡市の端から伏木に向けて立派な近代道路が出來てゐる、聞けば昭和六年時の政府が失業者救濟の爲に起工せしめた府縣道改良事業のお蔭であることが判つた、詰り高岡市にゐる失業者に授職せしむる爲に此道路を新設したのだ、と聞かされた、延長四千八百米、幅員六米で其の過半は鋪装されてゐる、當時各地で起された同種事業は二千五百萬圓もありつて、相當の成績を收めてゐるのであるが、各府縣とも各種の事情に禍されて、地方的に分配したから見るべき大きな事業は殘されてゐないが、此處富山縣のやうに配當事業費の大部を一箇所に集中したのは、假令高岡に失業群があつた勢であるにしても、良く思ひ切つて執行したものだと嘆賞せずには居られない、之を計畫した當時の土木課長は今の靜岡縣土木部長の木村憲七郎である、彼は洋行後道路改良の效果を體験しつゝも、不幸にして餘り道路に熱のない富山に配せられ、其の手腕を振るべき餘地がないものと人をして同情せしめたが、此事業を見て彼が窃に其の所望

を達成してゐることが判つた、高岡市も夫れに勵まされて、市役所前から夫れに接續する道路を擴築してゐる。

高岡が富山に較べて活氣のあることを讀えてゐると、K事務官はコ一語るのであつた、今頃長岡を視察されると間違が多い、今は漸く暖國らしく雪も見えないやうに爲つたが、冬になると雪の爲に交通が杜絶する、従つて屋外でやる各種事業は中止の外ないのであるが、此特殊事情を知らない東京人間は、地方の役人が急げてゐるやうに言ふけれども、天候の然らしむるところ如何とも仕方がない、今頃に旅して雪景を知らない人々は此寫眞を持つて歸つて呉れと、念の入つたお土産を頂戴した。

伏木港で呑吐せらるゝ貨物の内で高岡に取りさるゝもの



市 長 岡 雪 の

は隨分多いのであるが、兩都市の交通には假令省線鐵道が敷設されてゐても、鐵道運賃では經濟上の效果を擧げ得ないのだから、此位の道路が要るのは當然だ、併し從來の港灣計畫では鐵道だけで後方地帶との連絡を圖ろうとしたのだから港灣の機能を擧げることが出來なかつた、此處の伏木港でも矢張り其の缺點を持つてゐたのに、偶然にも失業者救濟事業が出来て、木村君が其の缺點を補つて呉れたやうなものだ。高伏間の連絡に就て思ひ出さず居られないのは淺野總一郎である、利益を逐ぶに抜目のなかつた彼は、矢部川を改修して運河を造つて一と儲けを策したものであつた、彼は富山在藪田村の產だから郷里に一大效

績でも残そうと思つたのであらう、併し運河自身の計畫だけでは算盤が合はない、運河沿の土地を買収して工場敷地にし賣らなければ仕事にならぬ、併し其の土地の取得に就ては土地收用法の適用がない、夫れで事業を廢止するに至つた、賣るもの買ふもの何れも劣らぬ勘定家であるからだ腕一本すね一本で天下の淺野とまで言はれるやうに叩きあげた彼でも、之には如何にも腕の振ひやうが無かつた、さぞ富山縣人の根性に我と我身を顧つたであらう。

○  
伏木港も新潟港と同じやうに小矢部川と庄川との間にある河口港であつて、矢張り河口港としての惱の種、流砂の撃退に悩まされたが、明治三十三年庄川が改修さるゝとき港湾の修築が計畫されて、庄川と小矢部川とを分離して土砂の流入を防ぎ、港口には防波堤を内港には岸壁を建築して港灣設備を完成したのであつたが、縣が其處に横棧橋を設け上屋を築造するやら、軌條を敷いて鐵道中越線との連絡を圖つたので、港勢頓に進展しだした、夫れに味をしめ

た地方は年百五十萬噸の貨物を呑吐する基礎の下に、事業費四百五十五萬二千圓で大正十三年から擴張工事を始め、昭和十年に完成する見込んで内務省が地方の委託を受けて今盛に仕事をしてゐる、之が完成すると、棧橋は五百五米、繫船壁が千四百五米、物揚場は九百九十米夫れに在來の川岸延長千五百四十米あるから、同時に接岸することの出來る汽船は、六千噸級二隻、四千噸級一隻、三千噸級四隻、二千噸級二隻、一千噸級十隻と計算して優に豫定計畫以上に役立つと、技師の大島太郎君が入念に説明して呉れた、あれは××會社の工場だ、向ふに見える煙突が日本鋼管會社ぢやと、教へられ案内さるゝまゝに新湊町の光景やら放生津潟にまで足を伸ばしてしまつた、成る程、工場敷地は新潟の夫れよりかは發展してゐるらしい、併しあ隣りの新潟港や敦賀港も矢張り同じやうな狸の皮算用をしてゐるから、夫れ程に汽船が來て呉れるかゞ疑問であらう、殊に同じ縣下でありながら、富山在の岩瀬港を修築して富山から岩瀬まで運河を掘つて、代用富山港を挙げる計畫を進めてゐるの

だから始末が悪い、若し夫れが完成したら歎くとも伏木港を經由し東岩瀬乃至は富山へと出入した貨物だけが減ることは請合だ、ヨーなると小港灣の對立競争も考へものだ。

○

高岡に敬意を表して西、石動町へと去る、街道兩側の竝木は昔を物語るやうではあるが、夫れに答へるだけの材料がないのは悲しい、東五位村の和田や立野村に這入ると、今も女郎屋が軒並に商賣してゐる、街道沿ひとは言ふものゝ草深い片田舎に此家があるのは少々判じ兼ねたが、同行の人々の言ふことには高岡では價が高いので、此方面に活動するから繁昌するのだと教えられた、矢張り昔からの宿場であつた爲に其の惰性が竝木と同じやうに残されてゐるのだろう、考古學者に言はしめるよ、延喜式に坂本川合の驛名が載せられてゐて、坂本が今の石動であるから川合は伏木との中間の驛で今も五位庄の邊だと言つてゐる、延喜時代からの宿驛とすりや女郎屋のあるのも不思議ではなからう

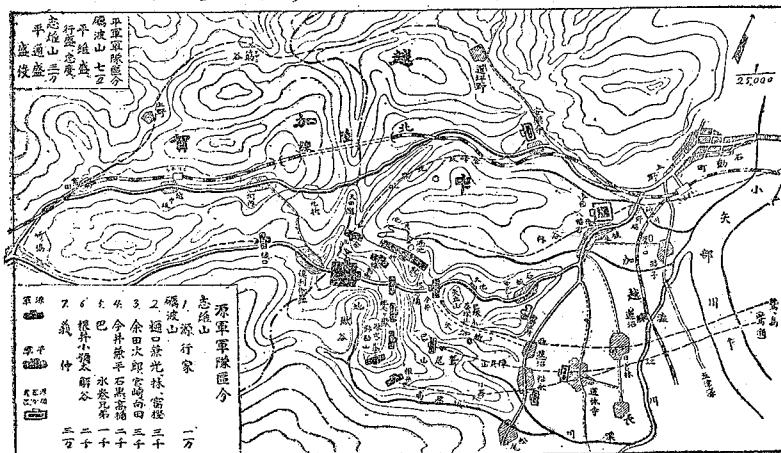
路幅は十分ではないが路面は餘り悪くもない、いつの間にか石動町へ來た、石動と言ふのだから地震にでも關係があるらしいものは眼に附かないが、溜池の周圍には幾本とも

ホーテルの番頭に聞くと高岡で見るのは今公園になつてゐる高岡城趾だけぢやと教へられ、市の特産物銅で持えた大きな大佛の前を通つて出たのが射水神社であつた。今日は昨日とは違つて快晴なのでお禮を言上して國內を拜見する、慶長十四年の三月に富山城が焼けたので、前田利長が此處に築城して高岡と名附け、太閤さんから戴いた伏見館の良材で殿閣を造つたが利長は十九年五月此城で死んでしまつた、其の後稻垣與右衛門が居たが元和元年殿閣を撤去され、其の後は廢城となつたものだ、土地の人は未完成の城ぢやと言つてゐるが、夫れは蓋し間違であらう、此處の城は他の城とは違つて櫻馬場があつて長さ三百間、兩邊に白櫻を植えたのが特長だと、ものゝ本に書かれてあるが夫

あるのであらうと、思ひ付きの漫談に耽つたが、夫れは出放題の話で、天正十年能登國石動山の虚空藏尊を此地に移したから此處を石動と言ふやうに爲つたと聞かされ夫れでは能登の石動山こそ地震に關係がある位にして俱利加羅峠に差しかゝるのである、併し此峠のあるお蔭で此處石動が發達したことを忘れてはならぬ、延喜式の驛名、越中の國の坂本は坂の下にある驛だから今石動町の坂又の附近であらうと言はれてゐる。

俱利加羅峠は、昔から八ヶ間敷言ひ囃されたものだ、今更源平の合戦を物語るもの古きに訶る嫌はあるが、木曾を勝たせたと言はれ

## 碁波山・須山・須山古戰場案内圖



てゐる埴生八幡の宮司が、戰況を説明して呉れたので、夫れを傳える爲に源平盛衰記の一部を借用して戰況を報告する。

木曾は礪波山黒坂の北の麓、埴生の社八幡より、松永、柳原を後にして、黒坂口に南にむかつて陣を取る。平家は俱利加羅が峠、猿馬場、塔橋よりはじめ、これも黒坂口に進み下りて、北に向うて陣を取る。兩陣相隔たる事五六段には過ぎず、互に楯を突向へたり、木曾は勢力を待ち得ても合戦をば急がず。平家の方よりも源氏の様を守つて進み戦ふ事なし。閔の聲三箇度合はせて後は、兩陣轉まり返つぞありける。良暫しあつて源氏の陣より精兵十五騎を楯の

面に出して、十五の表矢の鏑を同音に射さすれば、平家よりも十五騎を出し合はせて、これも十五の鏑を射返す、互に勝負せんと進みけれども、陣より制して招きければ、源氏は柵の内に入る。源氏入れば平家も同じく入りにけり。と許りあつて二十騎出して射さすれば、又二十騎を出し合はせてあひしらふ三十騎五十騎出し合はせく射けれども、互に勝負はなし。かく操り日をくらして夜に入りて後の山より搦手を待つて、追手搦手押寄せて南の谷へ追ひ落さんと計りけり。平家これをば知らずして、あひしらふこそ無慙なれ。

五月十一日の夜半にも成りにけり

五月の空の辯なれば、曠に照らす月影、夏山の木の下暗き



埴生幡宮

細道に、源平互に見え分かず。平家は夜討こそあれ、打解け寝ぬべからずと催しけれども、下り疲れたる武者なれば、鎧の袖を片敷き、兜の鉢を枕とせり。源氏は追手搦手様々用意したりける中に、柵口次郎兼光は搦手に廻りたりけるが、三千餘騎、其の中に、太鼓、法螺貝、千許りこそ籠めたりけれ。木曾は追手に寄せたりけるが、牛四五百疋取集めて、角に續松結附けて、夜の深くるをぞ相待ちける、さる程に柵口の次郎、林富樺を打具して中山を打上り、葦原へ押寄たり、根井小彌太三千餘騎、今井四郎二千餘騎

北黒坂南黒坂引廻し、闕を咋り太鼓を打ち法螺を吹き、木

の本萱の本を打ちたためき墓<sup>ムカツラ</sup>目<sup>メ</sup>鎗<sup>アマツシ</sup>を射上げてとごめき懸り  
たれば、山彦答へて幾千萬の勢と  
も見えざりけるに、木曾「すはや  
揚手は廻りける鬨<sup>ヒ</sup>を合はせよ」と  
て、四五百頭の牛の角に松明をと  
もして平家の陣に追ひに入る。胡頬<sup>グク</sup>  
木原<sup>キハラ</sup>、柳原<sup>ヨハラ</sup>、上野邊に控へたる  
軍兵三萬餘騎、鬨<sup>ヒ</sup>の聲を合はせ喚<sup>ハス</sup>  
き叫び、黒坂表へ押寄する。前後  
四萬餘騎が鬨<sup>ヒ</sup>の聲、山も崩れ岩も  
摧くらんと夥し。道は狭し山は高  
し、我先きくと進む。兵は多し、  
馬には人、人には馬共に壓しに、  
抑されて。矢をば弓を引くに及  
ばず、打物は鞘を外し兼ねたり、  
追手は揚手に抑合はせんと攻め上  
る、揚手は追手と一つにならんと喚き叫ぶ、平家は兩方の

中に取籠められたり、軍は明日ぞあらんすらんと取延へて

思ひける上、如法夜半の事なるに、

俄に時を造り懸けたれば、こは如何

せんと、東西を失ひ周章て騒ぎ、弓

取る者は矢をとらず、矢をば負へど

も弓を忘れ、鎧を着て兜をきず、太

刀一つには二人三人取附き、弓一張

には四五人攔み附けり。馬には逆に

乗つて、後へ蹴かせ、或は長刀を逆

馬に突いて、自ら足を突切つて立ち上

らざる者もありければ、踏殺され蹴

殺さるゝ類多し。主の馬を取つては

主を忘れ、親の物具を着ては親を顧

みず、唯我先々々にと争へども、西

は揚手なり、東は追手なり、北は岩

石高うして上るべき様なし、南は深



場

ケ

猿

如何すべきかと方角を失へり。（中略）爰に不思議ぞ有りける、白装束したる三十騎計り南黒坂の谷へ向つて「落せ殿原過ちすな！」とて、深谷へこそ打入れけれ。平家これを見て五百餘騎連いて落したりければ、後陣の大勢これを見て「落足がよければこそ先陣も引返さざるらめ」とて、劣らじくと、父落せば子も落す、主落せば郎等も落す。馬には人、人には馬、上が上に馳重なつて、平家一萬八千餘騎、十餘丈の俱利加羅が谷をぞ馳埋みける。

○

名高い俱利加羅の峠は、今の峠ではない石動の町はずれ野端と言ふところから左折して。義仲が祈願したと言はれてゐる埴生八幡の前を通つて礪波山頂に達する幅二間位の道が夫である、徳川時代には又其の道路を換えたものと見へ、今の役場の前から左折して峠にかかるものとしたらしい、夫れは蓮沼西の附近に關所が設けられてゐるからだ。巴塚や葵塚、夫れから源氏が峯地獄谷と源平時代の軍物語の種を残してゐる、俱利加羅堂の舊址にある手向神社

も、今は荒れはてゝ、神官も居ない、土地の青年が神社の寶物を取出して色々説明して呉れたが、夫れの眞否は判断し兼ねた、手向神社の坂上からは高岡附近一帯の平野を一望の中に收めることが出来た、各在所々々に點在する家々の傍には大樹が植え附けられて、人家の存在を隠してゐる、夫れは前田藩主が治領の勢力を徳川家に隠蔽する爲にやらせた勢だと聞かされ、前田藩主の施政が要意周到であつたことは驚くの外はない。

○

今この國道は徳川時代のものを捨てゝ天田越を探つて、明治十年に改良したものだ、明治の初期では著大な事業であつて苦勞したに違ひない、で之に從事した人夫や工夫で命を取られた者も尠くなかつたと見え、東京の玉垣内の玉津川髮吉と言ふ力士らしいのが、供養塔を建てゝゐる、さすがは力士の本場だと感附かれる、夫れは夫れとして此事業に對しては政府も之を助成して、國費を支出してゐる位だ、峠の頂上には自然の源水を導いて通行人の飲料に供してゐるのも、何となく旅人の旅情を慰めてゐる心地がして

嬉しい、其處に林伊右衛門とやら言ふ名望家が碑を建て、「諸人もくめや天田の力水」と謳つてゐるのは、旅する人々に温情を與へる、併し明治時代の改修も自動車の發達した今日の交通には十分ではない、そこで政府は、昭和七年度に工事費六十萬圓で延長一萬二千八百米、幅員六米に改良して自然の天險、俱利加羅——天田越の坂路を改良して自動車交通に供することにしてゐる、此處を通つてゐる省營鐵道も坂路であるが爲に奄々として登つて行くので到底

自動車の速力には勝てないのを道路を通る者には一つの快味である、併し内務省のやつてゐる仕事は、直營のお蔭で餘りにも立派過ぎる嫌はないでもない、殊に體裁を悪くする必要もないが、良くするが爲に費用を要するものとすりや、夫れを節約して改良延長の増加を計つて貰ひたいものだ。

峠の頂上が崩壊したので、林伊右衛門さんの建てゝ呉れた水飲碑も顛覆したが、夫れに何物かを附け加えて復舊すると言つてゐる、此くあるべきことであらう。

案内して呉れた土地の青年が、地元村と縣廳との喧嘩話

をする、何事であらうと聞いてゐたが、内務省が此峠の改良事業費の一部を石川縣に負擔せしめた、ところが縣は地元が利益するのだと認めて、俱利加羅村へ數萬圓の受益者負擔金を賦課した、此峠の改修こそは地元村の利益に歸するものでないと言つて、行政訴訟を提起したことであつた、裁判の決定はまだ聞かないが、源平の戦とは違つて勝敗何れにあるにしても、此處の受益は高岡富山間改良の比でないことだけは明かだ。

此處で専し考へさして貰ひたいことがある、夫れは俱利加羅峠改良の効果だ、高岡石動間の自動車交通は相當な數量を示してゐるが、夫れから峠までは交通量が激減してゐる。言はずも知れたこと峠がある爲に自動車の經濟的交通が出来なかつた勢だ、併しながら道路改良の効果を判断するには、現状の情勢に捉はれる必要ないのは勿論であつて、將來に得べき利益を推算すべきは當然である。今富山乃至高岡方面から金澤方面へ、又金澤方面から高岡乃至富山方面へ移動してゐる貨物は鐵道の專業に爲つてゐるのだ

が、兩地方間の距離は自動車交通圈内にあるものと思はれる、で夫等の貨物中には自動車交通を利得とするものが渺くないことは當然である、又面一伏木港を中心とし對金澤の關係に於て、取扱はるゝ貨物は年十萬七千噸に達してゐる此約三分一が自動車交通に依るものと推定しても、港灣關係に於て三萬六千噸を見る譯であつて、從來兩者の交通を妨げてゐた俱利加羅峰の改良の效果が偉大であることが判るであらう。更に七尾港の海陸連絡設備否な道路設備が現在のやうでは、金澤方面の物資は伏木港を利用するであらう。こゝに想倒するとき此時改良の效果は一段の著大さを増すことであらう。

○

伏木港を見た上は七尾港を見て、之に接續してゐる指定府縣道現場を視察せなければ、見學が徹底しないと聞かされたので、夫れに足を向けるのである。津幡の町で富山縣の人々と別れて指定府縣道七尾金澤線のお世話になつた、昔からの七尾街道ぢやが、ところへんに近代的な改良部分

を見るだけで昔のまゝに捨てられてゐる、だから津幡七尾間、二十里にも足らない交通に四時間を要する有様だ。之だから七尾港を改良して見たところで後方連絡施設が其子では、港灣の效用が舉らないと、港灣を見ない先から其の價値を疑ひ始めた、併し自動車の上から足下に表はれた七尾の町を見出して又其の疑問を裏切つたりするのであつた、夫れはセメント會社やらの煙突を見出したからである七尾港は前面に能登島が控えてゐるので、自然的に惠まれてゐる、東は小口瀬戸、西は三ヶ口瀬戸を通じて外海と連絡してゐる、港灣の設備としては餘り囃し立てるだけのものがない。

○

港内を一巡して和倉溫泉の客と爲つた、溫泉關係者は、平城天皇の御代大同年間に湧出したもので北陸一の溫泉場ぢやと誇つてゐて、明治十三年獨乙に開催された萬國鑛泉博覽會で、世界鑛泉の第三位に決定されたと自稱してゐるが、筆者等には夫れ程には感じがなかつた、唯だ銀水閣からの遠望は蓋し北陸第一と讚えておこう。